

Lesson 117

発想する！授業

生涯にわたって社会のいたるところで  
学ぶための方法序説

続18歳の社会教育・  
地方編

松田道雄

提案・自分のふるさとを高校生が外部の人に語れるよう地域の大人が支援する交流会を考えましょう。

先月号のこの欄で、社会教育事業において高校生の社会意識醸成と社会参加の窓口として大人と語り合う講座事例（東京都青梅市社

会教育課）を紹介しました。今回はその続編です。

高校生参加は、これまで社会教育課が取り組みたくてもなかなかきつかけがなかったと言います。18歳選挙権に伴い、社会教育課として取り組んでみようという意識が出てきたという声が聞かれます。さっそく、新年度事業に高校生参加の講座を計画されたという案内もいただきました（さわやかちば県民プラザ）。

今回紹介する高校生と大人の話し合いは、大人がふるさとのおよそを高校生に教え、高校生が他者にふるさとを紹介できるように後押しするという内容です。

場所は山形県川西町中央公民館。高校生はこの町の山形県立置賜農業高等学校の6次産業を学ぶ生徒です。まちづくりを考える講座（主催・小松地区地域振興協議会、共催・NPO法人えき・まちネットこまつ）に、大人とともに高校生もいっしょに参加したので、筆者と筆者の大学3年ゼミ生はファシリテーターとしてこの一連のまちづくり講座に参加協力しています。

写真1は、高校生1人と地元の大人2・3名が1つのグループに

なって話し合っている光景です。

この光景は、前号の青梅市での高校生と大人の話し合いと同じ風景です。しかし、この話し合いの中心はやや違います。

このまちを高校生が他地で初対面の人にこのまちを紹介するのにどのように語ったらいいかを、大人が高校生に知識を授けているところです。

その目的は、この高校生たちが、自分たちが作った農産加工品を自分たちで販売に行った際、自分のまちをその場で語れるようになることです。

この講座の前に、先行して東京でこの農業高校の6次産業担当の江本一男先生と卒業生が商店街の市で物産販売をしました。筆者とゼミ生はその市の販売現場にも参加して、物産屋台に立ち止まった人たちに、この町を簡潔にどのように紹介すればいいのかを体験調査してきました（写真2）。

米沢牛の串焼き屋台のわきで「実はこのまちが米沢牛の発祥の地なんですよ」と筆者が声かけたところ納得して買ってくださったりなど、いろいろなまち紹介の仕方を試行錯誤してみました。

江本先生は、地元のまちづくり

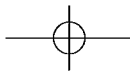


写真2 杉並区西荻窪商店街「西荻あさ市」での川西町物産販売屋台、2016年1月



写真1 山形県川西町中央公民館、2016年1月24日

NPO（えき・まちネットこまつ）の代表もされ助成事業を獲得しな



から、農業高校生の都市販売や食育ミュージカル都市公演などをサポートしています。農業高校生が東京へ行く機会があるのは江本先生のNPOのおかげです。

農業高校生たちが東京に行つて初対面の人に自分たちのまちと商品をどのように魅力的に語る事ができるか、これを今回の講座では、地元の大人がサポートすることがねらいです。そして、地元高校生による商品販売を通して、最終的にまち物産のファンが増え、訪れてくれる人も増えればいいなというのが願いです。

講座は、最初に東京での販売現場で聞き取りしたまちの認知度や売り込み提案などをゼミ学生が報告し、それも受けてグループごとに高校生がまちを語れるようにするふるさと談義を始めました。

筆者がここで提案したのは、あくまで目的は次世代のまちを担う高校生がどのようにまちを紹介できるかです。そのために大人がすることは、一方的に知っていることをしゃべるだけの「年寄りの長話」にならず、高校生の反応を聞きながら知恵を授け、高校生に語ってもらい語り方のアドバイスもしてくださいと頼みました。

自分たちのふるさとの未来は次世代（高校生）に託し、次世代がふるさとを担えるように支援育成する役割を明確に提示したのでした。

講座の最後に、各グループの高校生が発表しました。その時は、筆者が高校生の物産屋台に立ち寄ったお客さん役になり、高校生が筆者にまちを語るといふロールプレイの演技形式で語ってもらいました（写真3）。

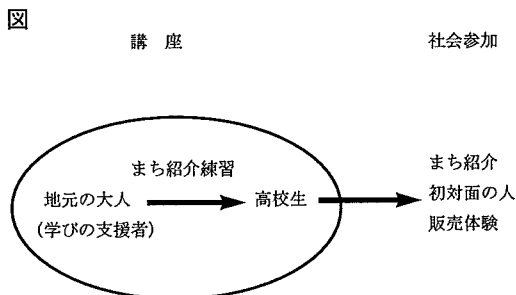
講座後、高校生に尋ねると、「緊張したけど大人の人からまちを教えてもらい、人に語る練習ができてよかった」と語ってくれました。



写真3 屋台販売を想定した対話発表

もちろん1回だけの練習では足りませんが、きつとこのような練習の成果は、実際の販売体験現場で自覚されることでしょう。

そして、地域の大人の方々にとつても、「自分たちが若い頃は、大人からまちを学んで紹介するこんな講座はなかったけど、若い世代に伝える機会があるのは楽しいね」という反応でした。この講座で地域の大人の方々が果たした役割は、まさに次世代の若者が外で評価されるように後押しする「学びの支援者」の役割です（図）。



たちでよそに売りに行ったり、外部者を観光に招くといった必要性はありませんでした。また、大家族だったので、世代間のコミュニケーションの機会はあったと思われまます。しかし、家族や地域社会で大人と若者が話す機会も減り、一方で外部との交流の必要性が求められていく現在、地方版18歳の社会教育（若者と大人の交流）は大いに必要になるのではないのでしょうか？

皆さんの社会教育事業でもぜひご検討いかがですか？ 「18歳の社会教育」の関心はあちこちで聞きます。この地方版の提案に対して、都市部の「18歳の社会教育」の中身のニーズはまた違うなどという話も先日聞きました。皆さんはいかがお考えでしょうか？  
きつと、多彩な「18歳の社会教育」実践事例を新年度紹介できるかもしれません。

（まつだ・みちお 東北芸術工科大学教授。住民の思いに耳を傾けられる学習支援をゼミで実践活動しています。）  
お気軽に連絡ください：  
matsuda.michio@agatuad.ac.jp